



1992年7月号  
470号

森道伯先生の師事した塩釜一貫堂の  
二代目遊佐快慎翁について 矢数道明  
傷寒論再発掘 ① 遊田裕政  
中疾病機治法学(七) 磯田雅夫  
第2回 村田公介監修  
目 ヒマラヤ・トレッキング(14) 御影雅幸  
越路の薬草・オオバクロモジ 山本敏夫

カット題字 西田明史

# 森道伯先生の師事した塩釜一貫堂の二代目遊佐快慎翁について 矢数道明



- 一、いままでの経過
- 二、「玉造郡誌」に登場する鳴子村遊佐家々系十四代
- 三、九代目遊佐甚之丞平宣明と芭蕉「奥の細道」尿前の関所
- 四、塩釜遊佐家々系七代と一貫堂「さふらん」湯
- 五、塩釜市錦町無量山願成寺、塩釜遊佐家累代の墓
- 六、塩釜神社博物館に残る「さふらん」湯関係資料
- 七、参考文献

## 一、いままでの経過

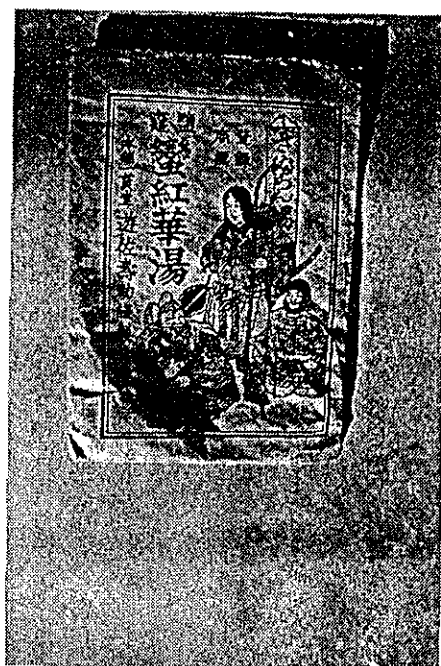
私は去る昭和62年3月、「漢方の臨床」誌第34巻3号で、「塩釜の遊佐一貫堂について」と題して小文を掲載し、平成2年「和漢薬」誌10月号に「塩釜遊佐一貫堂とサフラン湯(蛮紅華湯)」と題して、私の恩師下谷一貫堂療院森道伯先生が若き日に師事した、塩釜さふらん湯の創始者、産婦人科の漢方医塩釜一貫堂の遊佐快真翁(以下法名碑に基いて快慎とした)と現在のさふらん湯について紹介した。

以上の記録の第一は、塩釜市の医師村主蔵氏が「塩釜市医師会史」の編纂に当って調査されたときの資料をお借りしたもので、そのときは現在も

塩釜一貫堂のさふらん湯が発売されているかどうかにつき、戦後の売薬案内書など、その道の専門家に調べて頂いたが、ついに発見されなかった。ところが、第一の記録を読まれた高崎市に漢方薬局を開局して居られる温知会々員平木陽一氏と次女の方が、現在東北薬大薬剤学講師として勤務されている塩釜出身の櫻井栄一氏と結婚された平木氏の長女映子女史(東北大医学部薬理学教室講師)とに依頼し、仙台にて現在市販されているさふらん湯を購入して送って下さった。そのとき昔の塩釜一貫堂盛業時代の店舗などの写真も一緒に送って下さった。

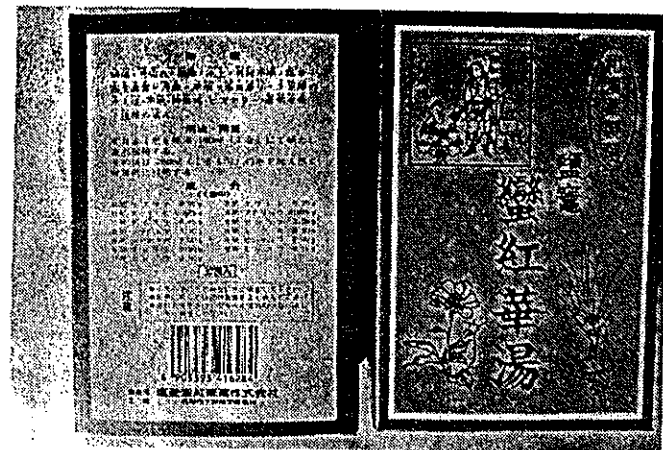
ところが、その後平木氏より、度々お便りを頂き、仙台薬大の同級生酒

居忠一氏が偶然にも、「鈴彦」が改称したサンエス本社、仙台市青葉区大手町一ノ一に勤務し、塩釜蛭紅華湯株式会社として、工場を宮城県名取市下余田字鹿島に新設して、その運営を担当していることが判明した。



往年昔の塩釜さふらん湯の登録商標本舖一貫堂遊佐壽助謹製

以後酒居忠一氏より、遊佐快慎の家系とその後の遊佐家の経過について、貴重な資料を次々とご送附を受けました。更に遊佐快慎の墓が、塩釜市錦町三番地、無量山願成寺に在り、歴代の墓



現在の塩釜さふらん湯表裏

碑と、昭和54年6月に遊佐徳治氏が累代の墓を合併整理した新墓碑の写真までお送り頂いた。そしていつでも案内いたしますという懇書が添えられてあった。よって平成4年1月26日の日曜日に、私は長男と共に仙台市を訪れ、平木陽一氏と酒居忠一氏ご両人の案内を頂き、五代目遊佐壽助氏と親しかったという塩釜市の薬局千葉武氏を加えた三人のご案内を受けて、願成寺に塩釜遊佐家歴代の墓に詣で、次いで塩釜神社に参拝、附属博物館に保存されている往年盛業

時代のさふらん湯の金看板や焙煎用の大釜などを閲覧した。この日遊佐家の端緒を記録して下さった村主巖氏ともお目にかかる筈であったが、とりやめとなったので、千葉氏とご一緒に撮られた写真を頂いた。

そこでこの度は、平木、酒居両氏より送附を受けた資料を基として、千葉氏の語ったところなどを加え、恩師森道伯先生の師事した塩釜一貫堂二代目遊佐快慎翁とさふらん湯の変遷についてまとめてみたいと思うのである。またその後酒居氏が、サンエスの社内報「サンエス」・平成3年10・11・12号所載の貴重な資料「塩釜・蛭紅華湯ものがたり」も引用させて頂いた。

塩釜さふらん湯は、昭和47年3月、七代目遊佐徳治氏のと看、鈴彦（現在はサンエス(株)に社名変更）がさふらん湯の業務を引継ぐこととなり、工場を塩釜市宮町四一より宮城県登米郡登米町に移し、鈴彦の子会社となった。そして昭和52年12月登米工場を閉鎖して、宮城県名取市下余田鹿島のサンエス配送センター内にGMP工場を新築して、「塩釜蛭紅華湯株式会社」と改め、酒居忠一氏がその業務を担当している。主として東北六県にて特約販売を行い、一部東京にも販路を拡げ、往年の信用を恢復しようとしている。以上がその後判明した、さふらん湯の経過と現状である。

## 二、「玉造郡誌」に登場する鳴子村遊佐家々系十四代

安永二年（一七七三）に調査記録された、宮城県玉造郡「安永風土記」によると、遊佐家の祖先は、鳴子村の大肝入（名主、村長、関守り、肝煎りともいう）遊佐勘解由平宣春が始祖となっている。そして天保年間十四代までの記録がある。

今から四七〇年前の大永元年（一五二二）、伊達と最上の両藩に紛争が起り、今の鳴子トンネルの上の小高い所にはじめて関所が設けられた。後年この関所に任ぜられたのが、遊佐家の祖、遊佐勘解由平宣春であった。それから九〇年後の元和元年（一六一五）に五代関守宣兼が、現在の場所に移転したと伝えられている。現在も八代より分家した子孫に当る遊佐菊枝氏その他一族の方が鳴子町に住んでおられるとのことである。

いまその鳴子遊佐家十四代より分家して塩釜の遊佐一貫堂が成立するま

での経緯を表示し、没年と享年を略記してみると次の如くである。  
遊佐家の先祖は平氏で、畑山兵衛公宣重で、子孫が出羽国遊佐郷の平津へ、郷聖子御下向のため、都より供奉として従った将監職（将監―おつきの武士）であった。この遊佐家が後年岩平関守となったのである。

遊佐氏

将監 初代 遊佐勘解由平宣春 天文二年没 享年六十九

白峯院徳雲道海

二代 遊佐長門平宣元 天文十年没 享年四十

三代 遊佐九郎左エ門平宣易 慶長四年没 享年七十八

四代 遊佐左近平宣歳 元和二年没 享年三十九

五代 遊佐但馬平宣兼 寛永二年没 享年六十八

肝入 六代 遊佐平八郎平宣重 万治二年没 享年七十二

肝入 七代 遊佐平左エ門平宣次 延宝四年没 享年六十七

肝入 八代 遊佐権右エ門平宣請 延宝三年没 享年四十三

肝入 九代 遊佐甚之丞平宣明 享保九年没 享年六十三

肝入 十代 遊佐平兵エ平信光 寛延三年没 不明

肝入 十一代 遊佐平左エ門平宣満 明和六年没 享年六十九

肝入 十二代 遊佐甚之丞平信頭 寛政二年没 享年七十一

肝入 十三代 遊佐平蔵平信行 天明元年没 享年四十四

肝入 十四代 遊佐平右エ門平信安 天保六年没 享年七十四

（信安の弟信春が分家して塩釜へ）松鶴軒亀翁善清居士

この信安の弟信春が分家し、塩釜に移住、医となって産婦人科さふらん湯塩釜遊佐一貫堂の始祖となったのである。

三、九代遊佐甚之丞平宣明と芭蕉「奥の細道」―尿前の関所―

前に述べた鳴子の遊佐家、第九代遊佐甚之丞平宣明が「尿前」の関守をしていた元禄二年（一六八九）五月十三日、松尾芭蕉は同行者河合曾良と共に平泉光堂より一ノ関、岩手山に一泊して、十四日の午後鳴子温泉を経

て、「尿前」の関所にさしかかった。

このこの関守が即ち遊佐甚之丞平宣明で、この関所は、岩出山藩の役人も出張し、厳しいことで有名であった。「奥の細道」をみると次のように書き残されている。

「南部道遙かに見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎、みづの小島を過ぎ、鳴子の湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に越えんとす、この道旅人まれなる所なれば、関守に怪しめられて、やうやうとして関を越す。大山をのぼって、日既に暮れければ、封人（関守）の家を見かけて、舎を求む、三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す」と。

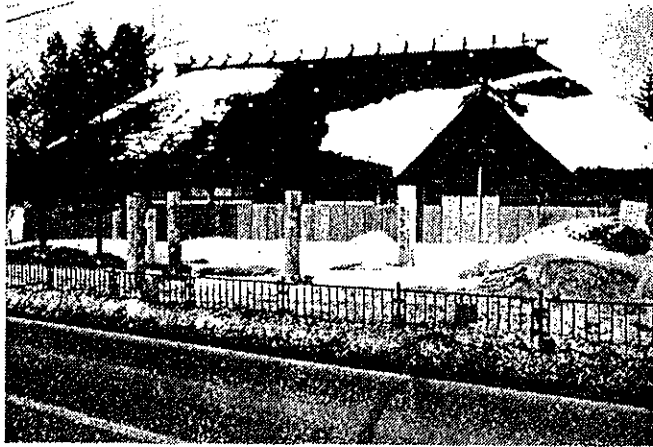
封人とは関守のことである。この堺田の関守の家に泊って、そしてあの名句が生れた。

蚤虱馬の尿する枕もと

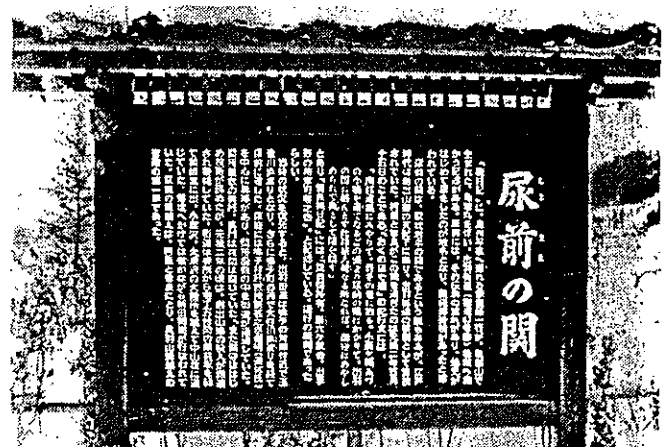
十四日の夜泊った堺田の関守の家は、土間に厩のあるむさくるしいあばらやであった。そこでこの有名な句が生れたといわれている。尿（しと）を尿（ばり）とよむ人もある。ところが、この関守の名は有路家で、代々庄屋を世襲し、三百年を経た今も当時のおもかげをそのまま残し、復原されたその家は重要文化財に指定されているという。

そしてこの句碑はこの有路家の前庭と、尿前の関所の跡、何もない杉林の中に、同じ句碑が建てられてあるという。有路家の家屋はあばらやどころか、写真を見ると実に堂々たるもので、重文の名に恥じない威風がある。このたびこの地を訪れたかったが、残念ながら日帰りで、遊佐本家の子孫のいる鳴子を訪れることなく帰宅した。

芭蕉と曾良は、頑丈な若者、反脇指を腰に櫛の杖を持った屈強の道案内を頼んで出発した。あるじの言うにたがわず、高山森々として、一鳥声を聞かず、木の下は昼なお暗く葉が茂ってまるで夜道を歩くようである。次の最上の庄に出た。奥の細道の中で最も困難な行程で、このところは、いとも追剥ぎが出て旅人を悩ますとのことである。



元禄2年5月14日より5日間芭蕉が泊った野田の関守り有路氏の家、土間に紙がある文化財（復原された）平成4年2月 酒居氏撮



元禄2年5月13日芭蕉が調べられた九代遊佐寅明の守った関所



臨濟宗願成寺本堂前  
左より酒井、下原、天鼓、平本各氏 平成4. 1. 26

#### 四、塩釜遊佐家七代と一貫

##### 堂さくらん湯

宮城県「玉造郡誌」に登場する鳴子村遊佐家第十四代、遊佐平右衛門平信安の弟信春（後信勝と改む）は、分家して塩釜に移住し、塩釜神社門前に於て、初代遊佐快慎信勝と称し、産婦人科医となり、傍ら産婦人科の売薬、塩釜遊佐一貫堂さくらん湯（蛮紅華湯）を発売した。信勝は天保八年十一月十五日、行年五十五歳で没した。「華淵院一貫術居士」と諡された。塩釜遊佐家七代は次の如くである。

#### 塩釜遊佐家七代

初代快慎信春 (後信勝と改む)	華淵院一貫術居士	没年	享年
二代快慎信高	紹芸院貫堂普応居士	天保8・11・15	55
三代 寿助	憲徳院保寿宗佐居士	明治24・7・11	77
四代 寿助	承徳院祖道良寿居士	大正6・5・15	62
五代 寿助	心瑞院無相量寿居士	昭和19・10・2	75
六代		47・8・29	67
七代 徳治	謙光院徳心自性居士	54・6・3	41

二代目遊佐快慎は、明治初期、一時東京に出て、浅草に開業し、その折筆者の恩師森道伯先生が、十五歳の少年のときに入門し三年間師事した。しかし漢方は時運の勢に押されて衰退した。快慎は明治十四年、東京を引揚げて塩釜に帰り、第二代快慎を襲名し父業を嗣ぎ、産婦人科医として名声を挙げた。加えて売薬「さくらん湯」を拡大する地盤を作った。

二代目快慎は、一方塩釜町の町興こしに情熱を傾け、塩釜港の構築のため私財を投じ、東奔西走、囚人の労働力をも借りて、構築を大成したという。さくらん湯はその後中將湯、實母散と肩を並べ、日本三大婦人売薬と称されるようになった。

二代目快慎は、明治二十一年の東北線の開通、三陸汽船の営業開始のために、大功労者となり、明治二十四年七月十一日、行年七十七歳で没した。「紹芸院貫堂普応居士」と諡された。そして快慎は昭和十七年塩釜市制五十周年に当り、市に対する功労者として知事より表彰され、開港恩人として慰霊祭が行われたという。

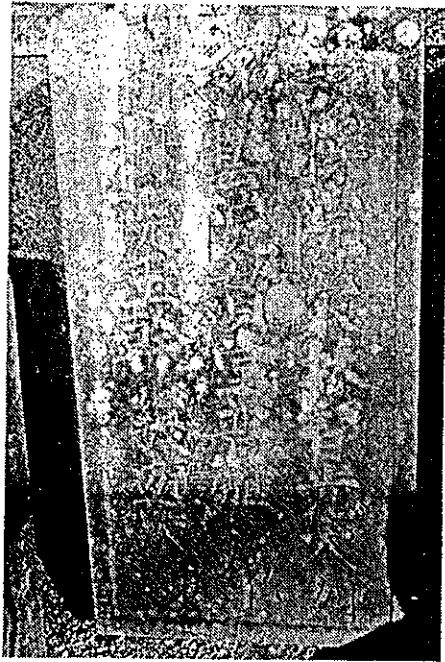
四代目寿助氏の長男喜平氏は、京都薬専を卒業し、京大の刈米先生の教室にて、生薬学の研究に従事していたが、昭和十一年惜しくも病を得て三十二歳で亡くなった。法名碑の後から二番目に法名が刻まれている。そのため親戚の義助氏を迎え、昭和二十二年寿助と改名し五代目を嗣ぎ、徳治氏が生れて後を嗣いだ。このとき願成寺は広大な墓地の整理を行った。

五、塩釜市錦町無量山願成寺、塩釜遊佐家累代の墓

前にも述べたように平成十一年十月二十六日曜日、幸い折からの暖冬と連続の快晴に恵まれ、筆者は長男圭堂とともに東京駅発、東北新幹線にて仙台駅に降り立った。駅には、平木陽一氏と、酒居忠一氏が自家用車を以て出迎えて下さった。酒居忠一氏は、前述の如く現在サンエス経営に移行した、



4代遊佐寿助 昭19年10月 75才  
初代宮城県薬剤師会長



2代遊佐快慎信高 明治24年11月 77才  
(中央) 紹徳院貴堂普應居士 (左) (右) は妻

塩釜蜜紅華湯株式会社取締役として名取市の工場を担当している。酒居氏よりは、その後遊佐家の家系、業績などについての諸資料を送り頂き、塩釜遊佐家のことについて、度々お便りを頂き、いよいよ筆者は恩師森道伯先生の師事された、二代目遊佐快



塩釜遊佐家初代より7代 法名碑合記

慎翁の葉參を決心したのである。仙台より塩釜まで車は快走し、塩釜北浜の薬局千葉武氏宅に立ち寄り、同乗案内をうけることとなった。千葉氏は五代目遊佐寿助と同級で、さくらん湯の経営にも協力されたことがあったという。四代目寿助氏は、初代宮城県薬剤師会長に就任し、社会事業に貢献するところが多かった。昭和十九年十月、七十五歳

で没した。五代目寿助氏は市の奉仕役職を数え切れぬほど担当し、毎日会議と宴会の連続で、殆んど奉仕の生活に明け暮れ、流石のさくらん湯の経営も傾き、昭和47年8月29日67歳で没した。願成寺には塩釜遊佐家の墓碑が初代より保存され、七代徳次氏が改修し、徳次氏は昭和50年6月3日に没した。昭和47年、当時の「鈴彦」が徳次氏より業務一切を引き受けたとのことである。参考文献(一)に於て、筆者らがその編集に際し、森道伯先生没後、家人や知人より訊き出した道伯先生の師事された、「仙台産婦人科の名医遊佐大葵」は、ここにはじめて塩釜産婦人科の名医二代目遊佐快慎であることが判明した。いまその墓前に参詣することができたことは、恩師の霊もさぞお喜びのことと思われるのである。

六、塩釜神社博物館に残る「さくらん湯」関係の遺品資料

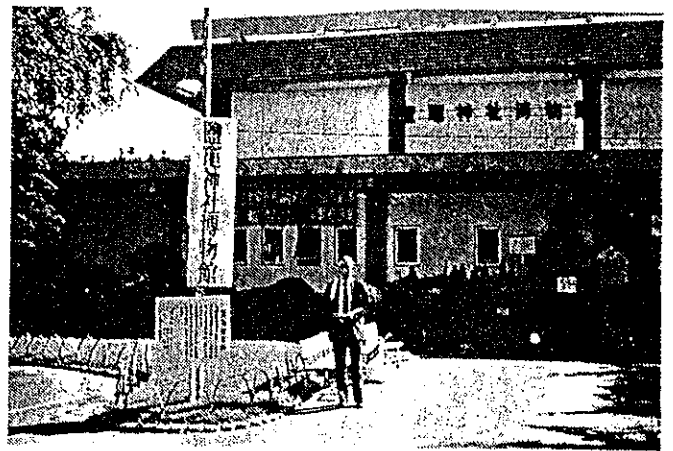
鹽竈神社の祭神は、塩土老翁神、武甕槌神、経津主神で、安産、延命、海上安全、大漁、産業開発を神徳とし、古くから東北鎮護、陸奥国の一宮として知られている。歴朝の崇敬厚く、明治七年国幣中社となった。奥州の藤原氏、伊沢氏、伊達氏の崇敬するところであり、志波彦神社は志波彦神を祭神とし、国土開発、産業開発を徳とし、明治四年国幣中社に指定された。



塩釜さくらんぼ湯 金看板  
塩釜神社博物館蔵



塩釜神社表坂楼門を望む  
202段の石段 寛文3年伊達村建立



塩釜神社博物館 酒居忠一氏

た近代的二階建の博物館が建設された。本館の裏に倉庫があり、その中に「塩釜さくらんぼ湯」関係の遺品が収められている。未整理のままであるが収蔵されていた、旧さくらんぼ湯倉庫の正面屋根の豪華な装飾、この中央に「さくらんぼ湯」の金看板が掲げられていたという。また、さくらんぼ湯の材料を修治加熱するときに用いた焙煎釜、盛業時代の金看板が二枚残っている。

塩釜神社に参拝し、博物館倉庫の案内を受け、さくらんぼ湯関係の遺品を参観し、権瀬直尾崎保博物館主事の詳しい解説を頂き、社務所応接間に

### 塩釜神社博

物館は五、〇〇点の資料を収蔵している。昭和40年環境と調和し

### 参考文献

て、磯貝洋一宮司のご丁寧な接待を受け懇談した。この応接室の窓からは、二代目遊佐快慎翁が修理に奔走した塩釜の港が一望のもとに見渡すことができ、漁船、帆船が繁く出入するのを眺めることができた。二代目快慎の功績を讃えるかのようであった。

後記

本稿を終るに当り、遊佐快慎翁についてはじめて知らされた「塩釜医史会史」にそのご研究を発表された村上徹氏と、その発端より、関係資料を次々とお送りくださり、この度の「案内」を頂いた、平木陽一氏と酒居忠一氏及び桜井栄一氏ご夫妻の終始周到なご懇情に対し、また塩釜神社宮司磯貝洋一氏、権瀬直尾崎保博氏のご厚情に対し、深甚の謝意を表する次第である。

- |       |                 |                 |         |
|-------|-----------------|-----------------|---------|
| 矢数 格  | 【森道伯先生伝】        | 一貫堂療院刊行会        | 昭和8年    |
| 矢数 格  | 【漢方一貫堂医学】       | 医道の日本社          | 昭和39年   |
| 村上 徹  | 【塩釜医史会史】        |                 | 昭和62年   |
| 矢数道明  | 塩釜の遊佐一貫堂について    | 「漢方の臨床」34巻3号    | 昭和62年   |
| 酒居忠一  | 塩釜の遊佐一貫堂とさくらんぼ湯 | 「和漢薬」49号        | 平成2年10月 |
|       | 塩釜さくらんぼ湯ものがたり   | 「サンエス」10・11・12号 | 平成3年    |
|       | 安永風土記玉造郡誌       |                 | 安永2年    |
| 田辺聖子  | 【奥の細道】          | 講談社             | 平成元年    |
| 毎日新聞社 | 【芭蕉の旅】          | 毎日新聞社           | 昭和47年   |
| 岡田喜秋  | 【歴史アイ】奥の細道と曾良   | 日本文芸社           | 平成4年    |

### 資料

- |         |               |
|---------|---------------|
| 平木陽一氏資料 | 写真・コピー・現物等    |
| 酒居忠一氏資料 | 写真・コピー・現物等    |
| 桜井栄一氏資料 | 塩釜さま絵はがき 塩釜神社 |